

特集
里地
～原風景を守り育てる～

Special Features
Rural land
Protecting and Nurturing Natural Scenery

里地里山総論
Outline of rural land and mountain

ふるさとの原風景を守り育てる

竹田純一

TAKEDA Junichi

里地ネットワーク事務局長



1—里地とは

里地とは、1994年の国の環境基本計画に織り込まれた概念で、「山地自然地域」「里地自然地域」「平地自然地域」「沿岸海域」の中のひとつです。山地は人の営みがないところ、平地は農林漁業がないところ、この中間としての「里地」は農林漁業が営まれ、人と自然が共生した暮らしが営まれてきた場所、ふるさとの原風景のような場所というように情緒的な概念で表現されてきました。

同時に、環境基本計画の中で、持続可能社会の可能性は「里地」にあるとした上で、この里地が存続しうるためには、食料と燃料が持続的に生産される地域内循環の仕組みが完結していなければならないと指摘しています。

京都大学名誉教授である内藤正明氏は著書の中で、里地には食糧生産を担う「経済的機能」、生物多様性の保持や二酸化炭素の吸収源としての森林環境を保全する「環境保全機能」、人の心をいやす景観などが存在することによる「審美的機能」の3つの重要な機能を位置づけています。



■図1—生物多様性から見た国土のとりえ方(新・生物多様性国家戦略 2002)

2—里地里山とは

里地里山とは、都市地域と奥山地域との中間に位置し、農林業等のさまざまな人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域を指します。田んぼ、小川、雑木林、草原といった身近な自然に恵まれ、日本のふるさとの原風景を思わせるような地域が「里地里山」です。

この人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域である里地里山は、人間の生活・生産活動の場であり、生活文化が生まれ、多様な価値や権利関係が錯綜する多義的な空間です。

同時に、人間の働きかけにより管理されてきた二次林、農地、ため池、草原などで構成される、多様な生物の生息・生育空間と位置づけています。

(1) 希少種集中分布地域

里地里山は国土の約4割(1600万ha)を占め、メダカ等の希少種、トンボ、カエル、カタクリなどさまざまな生物を育む生物多様性保全上重要な地域です。全国の希少種集中分布地域の5割以上が、里地里山に該当しています。同時に、里地里山は、身近な自然とのふれあいの場、自然環境教育のフィールドとしても欠かせない地域です。

(2) 里地づくりのモデル

里地には豊かな自然環境と多様な生物相、世代を越えて継承されてきた生活文化や物質循環の智慧、人と自然がふれあうことのできる場、そして、食料を生産し、水をたくわえ、エネルギーを生産する場などさまざまな機能があります。この多面的機能を活かして、生産、加工、直売、流通、体験、交流など里地の6次産業化をめざ



■図2—全国の希少種集中分布地域



■図3—自然環境教育のフィールド

すことで、森林、草地、農地、水路、景観、民家といった里地にあるものの多様性が増し、価値が高まります。そして、人・もの・生物・情報が行き来するつながりが生まれます。これら里地づくりの代表的なモデルには、「水・流域モデル」「人・体験交流モデル」「生物と産品・回廊モデル」などがあります。



■図4—水・流域モデル



■図5—人・体験交流モデル



■図6—生物と産品・回廊モデル

3—里地里山の現状と対策

里地里山は、人間が手を加えて管理することで特有の環境が形成され、維持されてきた地域です。しかし近年、雑木林(二次林)を薪炭林などに利用する機会が無くなり、さらに、農山村では過疎化や高齢化による管理放棄、都市近郊では開発等の土地利用転換が急激に進み、里地里山の喪失や質の低下、不法投棄等による大気、水質、土壤汚染を伴う環境負荷の危機にさらされてい

ます。また、里地里山の生物は、外来種の侵入や農薬土壌汚染等化学物質の影響で、絶滅の危機にさらされています。

(1) 二次林への対策

里地里山の中心をなす二次林は、薪や炭の材料としてすぐれているコナラ、クヌギ、アカマツなどからできています。かつての二次林はおおよそ10～30年ごとに伐採

されていたため、樹木は小さく明るい環境が広がっていました。このような二次林には、明るい林が好きなスミレ類、カタクリ、シュンラン、ツツジ類、ギフチョウなどがたくさん見られました。

ところが、燃料が薪から石油やガスなどに代わり、二次林の利用・伐採がなくなると、木が大きくなってソヨゴやヒサカキなどの常緑広葉樹やササが増え、林は暗くなり生きものが少なくなっています。また、タケノコの自給率が下がり、竹林も利用されなくなりました。タケのなかでも成長の早いモウソウチクはタケノコから約1ヶ月で20mもの高さに達し、1年に最大3～4mの割合で、まわりの植物を日陰にして枯らしてしまいます。増え続ける竹林は、これからの里地里山管理の上で最大の問題点かもしれません。

(2) 水田、ため池への対策

水が豊かな日本では、いたるところに水田が作られ、水田とそのまわりのため池、水路などは、カエルやサンショウウオ、メダカやトンボ、多くの水草にとって重要なすみかになっていました。しかし、減反にともない水田の面積は徐々に少なくなっています。とくに、生きものが多い谷間の水田はまっ先に消えて

いきました。また、ため池や水路の岸辺がコンクリート護岸に変わることによって、生きものの姿がめっきり少なくなりました。最近では、生きものが多い水田、ため池を取り戻すために、整備のやり方にさまざまな工夫がなされています。

一方、人によって他の地域から持ち込まれた生きものは「外来種」と呼ばれ、世界中で問題になっています。里地里山の水辺では、ブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの外来種が広がり、もともと日本にいた生きものを食べたりして生態系に深刻な影響をもたらしています。ひとたび持ち込まれた外来種を取り除くのはとてもたいへんです。まだ侵入していないところには、絶対に持ち込まないことが大切です。

(3) 里地里山の管理の推奨

手入れが行き届かず荒れていく里地里山を守るためには、管理の担い手を確保しつつ、土地利用の転換を防いでいくことが重要です。里地里山は「第一次産業の場」ですが、同時に「生物多様性保全・自然とのふれあいの場」でもあります。これからは、この価値をみんなで認めていくことが必要です。

4—里地里山からの新たな発信

持続可能な社会を構築するためには、環境への負荷の少ない生産と消費、物質的な循環、自然と共生した暮らしといった循環・共生型の社会システムへの転換が求められています。全国各地では、持続的な生産と消費が可能な豊かな里地地域の中で働き、暮らしたいという都市住民が増えています。里地の文化を守り、多様な生物相を復元する試みなど農村からの新たな里地づくりの発信が始まっています。

(1) パートナーシップで地域を見つめ直す

里地づくりの原点は、住民の好奇心と里地環境へのロマンです。将来に向けた里地づくりのビジョンは、地元を見つめ直すことから始まります。また、農家、住民、行政が一体となった取り組みを始めるためには、住んでいる地域を見つめ直す作業を共に行ない、情報とロマンを共有することが前提となります。

(2) 外部人材の活用

過疎化・高齢化の対策として外部から人を呼び込むことは、里地づくりのひとつの側面です。市民農園や滞在型のクラインガルテン(市民菜園)、棚田のオーナー制度、里山入会権、イベント等を通じた里地の紹介、空家や廃校の紹介など都市と里地の共同のふるさとづくりの取り組みがあります。



■図7—人と自然が織りなす里地環境づくり

(3) 里地の価値を高める水田稲作

高齢化や農業経済の環境変化の中で、環境保全型農業への転換を地域で拡大することは容易ではありません。地域ごとの創意工夫が必要になります。若手農家が、環境保全と作業受託を掲げてグループ化する動きは、その工夫のひとつです。

(4) 緩やかな境界線の復元

湧水、ため池、水路、水田、河川といった水辺のつながりを考えると、水を育む山や河畔林、水路周辺の植生も含めた全体的な里地基盤の復元が大切です。人工的な水路は近自然工法で生態学的に改修し、残されていた旧河道、河畔林、水田や畑などは豊かな水辺として面的にビオトープ(生き物があるままに生息活動する場所)を復元させます。

工事の材料は、現地にある野石や植物、土などを使うことが理想です。技術はかつての石垣や粗朶(間伐した細い木や枝を束ねたもの)を組む伝統的な技が有効です。人工的な工作物は必要最小限にして、自然の回復は、工事の完成後、自然自らの復元力で蘇らせることが特徴です。水の流れによって砂利や土砂が削られ堆積し、風や鳥たちが植物の種を運び自然の景観が再生します。

(5) エネルギーと里地素材の循環

里地地域では、自然の素材がエネルギー源や生活・生業の資材として循環的に利用され、その活用形態が里地景観を生み出してきました。里地における循環システ



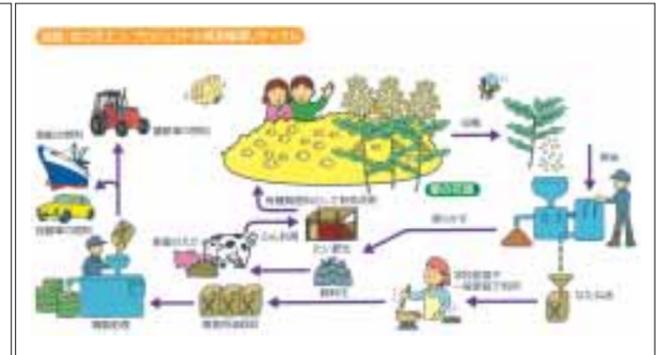
■図8—緩やかな境界線の復元

ムを見直し、新たな技術や価値観を加えることで、現代社会においても経済的に成り立つ地域資源の循環を作ることができます。

エネルギー循環を考えた取り組みは、農業振興、観光振興、小学校での体験学習、油かすの農業利用など、地域の中にあるバイオマスエネルギー(生物体の発酵等により得られるエネルギー)に注目したさまざまな取り組みへと発展しています。

(6) ふるさと絵地図

地域住民の中で問題意識をもつリーダーたちと、外部で応援する専門家等との交流が重要です。リーダーを核に里地づくり調査を行い、地域資源の全体像を地域住



■図9—エネルギーと里地素材の循環

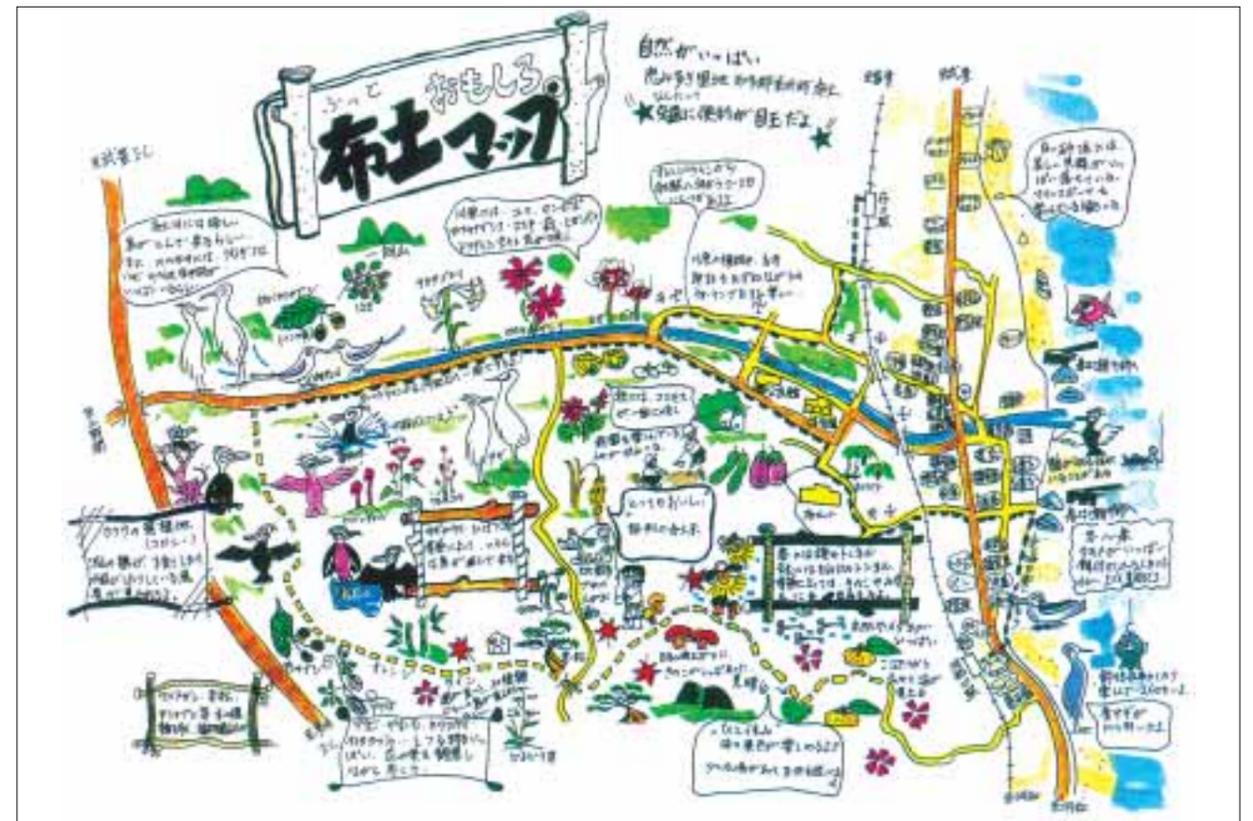
民で共有しましょう。子どもから高齢者まで全員が同じ情報を共有する手法として、調査員全員が白地図と色鉛筆、写真を用いて、ひと目で地域資源の全貌を確認できる方法があります。

5—おわりに

里地里山は日本人のふるさとの原風景の保全と再生のローガンです。このふるさとの原風景は、里地、里山、里川、里海などで農林漁業が営まれ、人が自然に働きかけ形成されてきた環境の保全と再生です。

<参考資料>

- 1) 里地ネットワーク <http://satochi.net/>
- 2) 森里川海フォーラム <http://satochi.net/saisei/>



■図10—ふるさと絵地図